

# 若宮宮司による長滝の延年の演目解説

## 長滝の延年試楽

毎年1月6日に長滝白山神社で「六日祭」が行われ、国重要無形民俗文化財の「長滝の延年」が古式ゆかしく奉納されます。「長滝の延年」は白山中宮長滝寺で大晦日から7日間行われた修正会の最後の日に若い僧や稚児が芸能で僧侶や神主を労い、また新年にあたり国家安穏、五穀豊穰を祈るものでした。

1月5日の試楽にあたり、若宮宮司が延年の演目を解説いたします。

2025年1月5日(日) 午後1時 長滝白山神社拝殿

# 六日祭

毎年一月六日 午後一時～三時

## 長滝の延年演目紹介

「長滝の延年」は、午後1時から行われる神事の後に奉納されます。

国家安穏・五穀豊穰を祈る

遊園芸能「長滝の延年」と  
勇壮な「花奪い」

毎年1月6日に、岐阜県郡上市白鳥町の長滝白山神社で行われる新春の例祭「六日祭」は、舞台上で国重要無形民俗文化財「長滝の延年」が厳かに舞われる中、拝殿天井に吊るされた5つの花笠を縁起物として参拝者が取り合う勇壮な「花奪い」が同時に進行するという「静」と「動」が入り混じった独特の雰囲気があります。

「延年」とは年(寿命)を延ばすというめでたい言葉で、「長滝の延年」はかつての白山中宮長滝寺で大晦日から七日間行われた修正会(社会の平和と作物の豊作を祈る法要)の最後の日に、若い僧や稚児たちが法会を終えた僧侶や神主をねぎらい、また新しい年が実り多い平穏な年となるよう祈りを込めて、白山の神に奉納する芸能でもありました。

「延年」の途中からは、参詣者が拝殿の天井に吊られた白山の神への捧げものである花笠の花を取り合う「花奪い」も行われるため、「花奪い祭り」とも呼ばれます。この花を持ち帰って家に飾ると、豊作や家内安全、商売繁盛にご利益があるといわれています。



① 酌取り(しゃくとり)

二人ずつの上酌・下酌の役者が延年の笛や太鼓の奏者に酒や肴を振る舞う儀式です。昔の白山中宮長滝寺は山岳修験の拠点でもあり、かつては上酌・下酌役は山伏たちが務めたといわれています。修正会の法会後に行われた宴会の名残であるといわれる演目ですが、寛治8年(1094)に、堀河院から寺家神領として飛騨国虎野が下賜された際の酒宴を表すとする説もあります。この後、舞台上の台に盛り付けられた菓子縁起物として参詣者に撒く「菓子台まくり」が行われます。



② とうべん

梅の形のかざしに梅根様の狩衣を着た「梅」の精と、竹の形のかざしに竹根様の狩衣を着た「竹」の精が登場し、拍子に合わせてとうべん平を手に天下泰平を祝して舞い、中央に進み出て神前で唱えごとをします。この演目は、中世において延年が盛行した時代の中心的芸能とされる「開口」「答弁」「連串」「風流」の4種の中の「答弁」にあたる演目といわれています。



③ 露払い(つゆはらい)

鬼の面に陣羽織風の着物を着た舞い手が登場して扇を振りかざして舞い、場を払い清めます。この演目は「じーひーや」「乱拍子の猩猩」とも呼ばれ、軽妙なしぐさが滑稽な味わいを添える舞です。延年における「射私」と呼ばれる種目の別名といわれます。



④ 乱拍子(らんびょうし)

金鳥帽子に緑地の狩衣と紫の袴をつけた稚児二人が扇と菊の花を手に登場し、笛に合わせて足拍子を踏みながら舞います。この舞は、女性と縁の遠かった寺院で稚児がさかんに褒められた時代の名残りとも、また長滝地内の各僧坊の小坊主たちの御披露の場であったとも考えられています。



⑤ 田歌(おた) / 花笠取り歌 / とうべん取り歌

「田歌」は、舞台中央奥の袴をつけたふし役の歌に合わせ、梅・竹の精がとうべん平を左右に振りながら優雅に舞います。その後、梅・竹の精が天井に吊った花笠に向く「花笠取り歌」、梅・竹の精が歌う「とうべん取り歌」が続けて演じられます。



⑦ 大衆舞(たいしゅうまい)

一人の役者が舞台に進み出て「イヤ」という掛け声とともに「トン、トン、トン」という太鼓の音に合わせて足拍子を踏みながら、急テンポに舞います。修行を妨げる八つ雲(喜・憂・楽・苦・愛・憎・同・息)を除く舞であることから「はっさい」とも呼ばれます。現在は一人で舞いますが、「大衆舞」という演目名から昔は大勢の僧侶が舞っていたとも考えられます。



⑥ しるすり

白鉢巻、たすき掛け、たつかけを履いた稚児が田歌で舞うしるすりをするところから「田打ち」とも呼ばれています。寺領で働く早乙女の親子の姿を演じた舞といわれ、口上ではかつての白山中宮長滝寺の寺領の範囲を述べており、美濃馬場の隆盛期を今に伝える演目として興味深いものです。

